

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 曹 榮峻

論 文 題 目

津島佑子の後期作品における表現手法と小説美学

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	飯田 祐子
委員	名古屋大学教授	日比 嘉高
委員	名古屋大学教授	星野 幸代
委員	東洋英和女学院大学名誉教授	与那覇恵子

## 論文審査の結果の要旨

### 〔本論文の概要〕

本論文は、津島佑子の後期作品をとりあげ、津島の独創的な表現方法と、世界観、倫理的美学の有り様を明らかにするものである。津島の作品は、デビューから 1980 年代始めまでの前期、1980 年代半ばから 1990 年後半までの中期、2000 年代以降の後期に区分される。前期と中期には自身の経験をもとにした作品が多く書かれたが、後期に入るとアジアの少数民族や近現代史に対する関心を深め、物語の舞台も日本から東アジア・中央アジア・東南アジアへと大きく広がった。先行研究は前期から中期に多く、スケールが格段に拡大した後期については、未だ十分な検証がなされていない。本論は先行研究の偏りをふまえ、後期作品の特異性を、小説技法の特徴を詳細に分析しつつ論じた。分析の主たる対象としたのは、『黄金の夢の歌』（2010）、『葦舟、飛んだ』（2011）、『ヤマネコ・ドーム』（2013）、『ジャッカ・ドフニー海の記憶の物語』（2016）、『狩りの時代』（2016）の五作品である。

全体は二部構成となっており、第一部では津島の表現手法について分析した。第一章で、日本文学を越え出ることを目指した津島の後期作品に見られる技法を、マジックリアリズムをキーワードとして総括的にとらえ、技法的特徴が作品の世界観とどのように結びついているかを論じた。第二章では、『狩りの時代』をとりあげ、近代社会において劣等の烙印を押された対象の価値の回復が、神話的想像力を基盤とした物語装置によってなされていることを明らかにした。第三章では、『葦舟、飛んだ』について、物語の核となっている、満州からの引き揚げ女性の話を扱った部分に焦点を絞り、戦時性暴力の被害者の破片化された記憶を聞き手に届ける多層的な伝達構造を分析した。第四章では、『ヤマネコ・ドーム』を対象として、主人公たちのトラウマになった混血の少女の死に関する集団的忘却と記憶の再構成の連鎖作用が文学的マジックによって語られていることを指摘し、マイノリティの問題の前景化と、責任意識の分有がなされていることを論じた。

第二部では、津島文学の世界観と倫理的美学について考察した。第五章では、日本と東アジアの様々なマイノリティの集合体を描く『ジャッカ・ドフニ』において、友情と共生の精神が越境の過程で生み出されていく様子を浮かび上がらせた。複数の時間軸をアイヌの歌が結びあわせており、近代国家としての日本における単一民族神話への対抗物語ともなっていることを論じた。第六章では、『黄金の夢の歌』において、遊牧民族の生き様と歴史に、自由で平等な世界の原型を発見する作者の眼差しから、近代国民国家の暴力性を批判する脱民族主義的世界観を抽出した。第七章では、『葦舟、飛んだ』に組み込まれている戦時と戦後における様々なサバルタンの生の苛酷な物語が、他者歓待の倫理意識の中で結び合わされていることを指摘し、第八章では、遺作となった『狩りの時代』に示された、「悪」を複層的にとらえる慎重な省察の姿勢から、津島の人間理解に関する不断の思惟と倫理的地平を明らかにした。

## 論文審査の結果の要旨

### 〔本論文の評価〕

津島佑子は、日本の現代女性作家の中でも注目され続けてきた重要な作家である。前期・中期には、作家自身の経験との重なりが認められる個人的な物語が描かれたが、後期に入って大きな変化を遂げ、時間的にも空間的にも大幅に作品世界を広げた。アジア全体を視野に入れ、個人を単位とした物語を国家や民族の歴史に繋ぐ壮大な長編小説が継続的に発表されたが、後期作品の研究は徐々に始められているという段階で、未だ十分な考察はなされていない。そうした研究状況にあって、本論文は後期作品を総括的に論じたものとなっており、その先駆性は評価に値する。

本論は、マジックリアリズムという用語を、津島佑子の後期作品の特異性の理解のために採用している。マジックリアリズムは現代ラテンアメリカ文学を説明する用語として知られるが、本論では、津島佑子作品における、非事実性、世界の複数化、特異な感覚描写、語る主体の重層性、ローカリティと共同体意識、神話的想像力、といった特徴をマジックリアリズムの発展的受容として位置づけ、説得的に論述した。

さらに、多くのマジックリアリズム作品において、作家の属する共同体の歴史的事件と民俗的幻想との結合がみられるのに対し、津島の作品においては、日本を脱中心化する混種的空間が描かれ、多重的時空の構成が超国家的で多元的な世界の創出につながっていることを指摘し、津島作品の独自性を剔出している。具体的なテキスト分析としても、津島の後期作品における語りの構造の複雑さを、語りの人称の多様性、時間構造の複雑さ、情報の伝達構造の多重性などから説明し、マジックリアリズムの手法がさらに複雑化した物語様式として解析した。これらの分析は、津島佑子の作品群を日本文学という領域を越えて世界文学としてとらえる観点に繋がるものであり、射程の広い考察となっている。

また、津島の後期作品は、女性に対する戦時戦後の性暴力やジェンダー規範による排除、障害、混血児、アイヌなどのマイノリティへの差別といった、社会的な問題を正面から扱っているが、そうした作品と作家の思想の特質を、倫理性という観点から具体的に検証した点も、深い水準での適切な作品読解として評価された。

しかしながら、問題点も指摘された。とくに、世界文学の文脈での分析に集中したために、一方で、日本の古典文学や口承文芸などの影響についての考察は不十分である。また、作品が主題的に扱う社会的問題の歴史的な背景や、それについての研究の展開、あるいは他の作家の実践などの調査が不足している。津島の特異性を十分に明らかにするためにも、作品の外部の調査をより充実することが望ましかった。加えて、各章のつながりについての説明不足も、指摘された。ただし、それらの点は今後、検討されるべき課題といえるが、決して本論文の成果の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。